

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4091700064		
法人名	有限会社森の母屋		
事業所名	グループホームはなれ		
所在地	福岡県直方市上境2614-3		
自己評価作成日	令和元年11月6日	評価結果確定日	令和3年11月29日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報の公表制度のホームページで閲覧してください。

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/40/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ヘルスアンドライツサポートうりずん		
所在地	福岡県直方市知古1丁目6番48号		
訪問調査日	令和3年11月18日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

日中は訪問看護ステーションの看護師が様子観察に来所します。また利用者が容体急変時は看護師がすぐに対応でき、連携している医師とも連絡をとり指示を仰ぎ、適切な処置を施す事が出来ます。施設の窓からは、福智山系が一望でき季節の移り変わりを目と肌で感じられます。施設の庭には畑を作っており季節ごとの野菜の収穫を見ることが出来、収穫した野菜は日々の食卓に並びます。特に夏はスイカ割、秋はさつまいぶを収穫ですが、今年はイノシシにほとんど食べられてしまいました。今年も、去年に続きコロナ禍のため外出できていませんが、施設の広場又は駐車場でコスモスの花見会、さんまバーベキュー大会を開催しました。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

遠くに見える福知山の景観をバックに敷地内の畑の作物や花々が訪問者を迎え、外部に続くウッドデッキではサンマ焼きや食卓を囲む事で、コロナ渦で出かけたくなかった入居者の癒しの空間となっている。食事や清掃を専門職員に任せる事で介護の仕事に専念し、職員同士も互いに尊重し合い、阿吽の呼吸でチームケアを展開し、自分らしく過ごされる入居者の心に寄り添い、理念の具現化に努めている。敷地内の母体訪問看護ステーションとの密な連携できめ細やかな援助を受け、本人、家族、又職員も安心して過ごしており、先日は100歳を超える方が、家族と会話した翌日に天寿を全うされている。面会でできない昨今だが、ホーム便りやこまめな電話連絡で家族の安心を支えている。地域の隣組に入会し、代表は防災委員となり、地域の方々との繋がりを深め、「慣れ親しんだ町で過ごせる」ホームを目指している。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~57で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
58	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:25,26,27)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	65	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9,10,21)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
59	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:20,40)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	66	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,22)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
60	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:40)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりの拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
61	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:38,39)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:51)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:32,33)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
64	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:30)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

ユニット/
事業所名 **グループホームはなれ**

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念は玄関の壁、スタッフルームに掲示している。朝礼時、理念を唱和し、利用者個々の生活環境を尊重し、日々の実践に取り組んでいる。	もともと老人が好きという職員は毎朝唱和している理念を語って、介護に専念できる現在の職場に落ち着いている。職員同士も互いに尊重し合い、阿吽の呼吸でチームケアを展開し、自分らしく過ごされる入居者の心に寄り添っている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の自治会隣組入会し、隣組の行事、市の行事には積極的に参加している。	自治会加入で毎月発行される区報にホームの紹介記事が掲載され、地域ぐるみの良好な関係性が伺える。入居者が楽しみにしていた牛相撲や火祭りなどの行事がコロナ禍で中止された中、年2回の清掃活動に代表が参加している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の区長、民生委員、老人会の会長等に認知症ケア、介護保険に関する情報提供を行い、地域の人々に向けて活かしていたが、今年は出来てない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議では、地域の方、利用者の家族に参加してもらい、当事業所の実態を報告し、出席者より意見や要望を出していただいている。運営推進会議の議事録はスタッフルームにて誰でも閲覧できる。しかし今年は出来てない。	前年度に続いて今年4月、市役所から運営推進会議の開催を控えるよう通達があり、報告書を整備している。家族へは2か月1回のはなれ通信に掲載して送付している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市とは、報告、連絡、相談等を電話や面談で行っている。	運営推進会議の通達後は、不定期に空き室情報のファックスを送付している。入居者の100歳長寿のお祝いに市長が来訪し、ワクチン接種等の連絡があるなど、協力体制を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	職員全員が身体拘束を理解し、日中は玄関の施錠はせず、職員見守りで自由に屋外へ出ていけるようにしている。	職員たちは定例会で内部研修を行い、言葉による拘束も理解している。センサーやベッド柵の使用はないが、最近、胃瘻を造設された入居者は不随意運動があり胃瘻を抜去の恐れがあるため、家族の了解を得て抑制着を着用されている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	事業所内では職員全員で虐待につながる行為がないか、確認を行い虐待防止に努めている。身体拘束についての話は、定例会議に取り入れている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	(6)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	職員には、会議にて研修している。利用者開始時には契約書等にて説明している。現在のところ成年後見制度の利用者はいない。	成年後見制度と日常生活自立支援事業のパンフレットを整備し、玄関に表示している。代表が外部研修を受け定例会で伝達研修している。開設以来制度の利用はない。	
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の際には、重要事項説明書について十分説明している。後日疑問に思われたことなどは、いつでも尋ねていただくよう伝えている。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	契約書の中に苦情に対しての受付を表示している。利用者からの事業所での苦情や、家族からの苦情に対しては迅速に対応し解決を図っている。	はなれ通信の家族への送付は、入居者の笑顔にホームの様子がわかると好評である。コロナ禍のため家族に電話で報告したり、家族から「洋服は足りてますか」など問い合わせがある。ラインで入居者の誕生日の笑顔を届けるなど、日頃の様子を伝えることで家族の安心を得ている。	
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日々のミーティング、定例会議等で職員の意見を聞く場を設けている。	月1回、日勤の終了後、定例会議を行い、ケア会議を含めた意見交換を行っている。先日、古くなった掃除機の意見が出てすぐに購入されている。在職年数が長い職員は、周りの職員も意見が出しやすくなるように自分の役割として意見を言うなど、雰囲気づくりに努めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	給与等に反映される査定や人事考課は実施し、毎新年度の4月分からベースアップにつなげている。介護福祉士等の資格を取得するための、研修勉強会等には優先的に公休、有休を与えている。		
13	(9)	○人権の尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。 また、事業所で働く職員についても、その能力を発揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	職員の募集・採用にあたっては、性別や年齢等を理由にして採用はきめていない。	ロコミやハローワークで採用され、現在30代から60代の男女の職員が全員が社員として就業している。調理や清掃は専門スタッフが配置され、介護に専念できるよう配慮されている。今年新規に1名が入職したが、長く勤務している職員がほとんど、職員間のコミュニケーションも良好でお互い思いあって勤務し、希望休が取れて働きやすい職場となっている。	
14	(10)	○人権教育・啓発活動 法人代表者及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	職員等に対する人権教育・啓発活動には研修を通じて取り組んでいる。	県のスキルアップ研修や技術向上研修に参加していたが、現在のオンライン研修は受講しづらく人権研修に参加していない。日頃の入居者への声掛けに気を付けて、理念に沿った基本姿勢を身に付けるように代表や管理者は指導している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		○職員を育てる取組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	今年、外部への研修は行っていない。定例会議にて又は、その都度看護師とトレーニングしている。		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会をつくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取組みをしている	同業者とのネットワーク作りや、勉強会は現在行っていない。		
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	利用相談を受け、初回来所時には利用者を尊重し、本人の困っていること、不安な事や要望などを、表情や行動を観察しながら、傾聴できる場の雰囲気、関係づくりに努めている。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の方が電話や来所された時には、困っている事、不安な事、求めている事をよく傾聴して施設の目的や機能、実施している事などの説明を行い家族の要望等を伺いながら、関係づくりに努めている。		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人、家族の思いや要望を把握して、施設の介護の特性や他施設の特性などの状況提供を行い、必要なサービス提供を支援している。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人の思いに寄り合いながら、日々の暮らしの中では、天気の良い日には一緒に散歩に出かけ。洗濯ものは一緒にたたみ、ゲーム・体操等は職員と一緒にやり、作品作り塗り絵等出来た時は達成感を皆で共有し互いに支え合う関係を築いている。		
21		○本人と共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	施設での生活の中で出た不安や要望を家族に伝え、家族に協力して頂くことで共に利用者を支える関係を築いている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	今年は、出来てない。面会者等が来所された時は、外デッキにて話ができるようにしている。	以前は馴染みの美容室に家族やホームからの送迎を支援していたが、入居者が重度化されて通えなくなり、月1回の訪問美容を利用し、馴染みの関係となっている。家族の面会はデッキやガラス戸越しなどのできる限りの対応をしている。	
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の相性等を見きわめ、相性の良い利用者同士を近づけ、独りになることを防ぎ利用者同士の関係の強化に努めている。		
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	施設で亡くなられた方の家族とは、これまでの関係を大切にしながら、支援に努めている。今年も初盆会に参列している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
25	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者一人ひとりと会話をし、希望や思いを把握できるようにしている。	清掃専門職員の配置で、入居者の対応に集中でき、うなずきや返事だけでも「時代劇を見たい」「部屋に戻りたい」など言いたい事を理解し、一人ひとりに対応している。調理の匂いに「腹減った」の声がし「100歳を超したね」などのおしゃべりもあり、日頃からその人らしい言動をそのまま受け止めている。	
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	情報を共有し、暮らしの変化を感じさせないように努めている。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	スタッフ間で一人ひとりの日常生活の情報交換を行っている。		
28	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	月末にチェックシートに評価を記入する。チェックシートも参考にして、現状に即した介護計画を作成している。	ケアプランはいつでも職員が見ることが出来る。短期目標を記載したチェック表には「介護拒否をしながらも職員への気遣いも感じられた」などと、担当職員による詳細なモニタリング結果や具体的な評価が記載されている。ケア会議での活発な意見を、日々の介護に活かしている。	詳細なモニタリング結果や具体的な評価が、個別性のある目標設定となる介護計画への展開を期待します。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護記録に一日の様子を記入し、朝・夕に申し送りを行うことで、利用者の変化に対応を職員間で共有しながら実践に生かしている。		
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	施設内では柔軟な支援に取り組んでいる。		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	今年は、地域資源を使つての支援は出来ない。		
32	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	2週に1回、利用者本人の症状に合ったかかりつけ医(神経内科または呼吸器系内科)の往診時に、日々の変化を伝えることで、適切な医療を受けられるように支援している。	専門医受診は職員だけでなく、家族が同行される入居者もある。かかりつけ医の往診を受けられる入居者も、敷地内の母体訪問看護ステーションと医療連携ノートを活用し、適切な医療を受けられるように支援している。	
33		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	バイタル測定や利用者本人の様子がいつもと違う時には、訪問看護のナースに報告し、対応して頂く。(訪問看護ステーションは同一敷地内で誰かが常駐)		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	病院の先生やソーシャルワーカーとの連携を密にとり、入退院の打ち合わせや状態の把握に努めている。早期に退院しても病院の先生の特別指示書等により訪問看護が対応している。		
35	(15)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	「重度化した場合・看取りに関する指針」を作成する。利用者家族、介護職員、管理者、かかりつけ医、訪問看護の連携にて取り組む。	重度化や看取りに関する指針を整備し、先月104歳の入居者は家族と言葉を交わした翌日に、天寿を全うされた。緊急時に即対応できる母体訪問看護ステーションのバックアップを受け、胃瘻造設された入居者で口からも摂取できる方にはできる限り摂取を支援したり、膀胱瘻を造設された方のトイレ通いを見守るなど、「自分らしく自然に生きる」事ができるよう支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急事態発生時のマニュアルはあるが、実施訓練を定期的には行っていない。しかし、実践にてその都度訪問看護と適切に対応している。		
37	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	地域(上境)の消防団とは協力体制を築いている。消防団長とは時々情報交換をしている。	災害マニュアルが整備され、施設前の広い駐車場が避難場所となっている。代表が地域防災委員として活躍し、コロナ禍で敷地内の事業所と合同の避難訓練はできなかったが、ホーム独自で自主訓練を行う予定である。日頃の食材や消耗品は、消費期限を見ながら多めに購入し在庫している。	非常時持ち出し書面や備蓄品の検討や選定で、自然災害や新型コロナウイルス感染症発生時の事業継続を期待します。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
38	(17)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者の方々には人生の先輩であるという尊厳の念を持って接している。個人情報やプライバシーの確保は職員間で情報交換を行いプライバシーに配慮した対応に心がけ、実施している。個人記録に関しては施錠できる場所に保管している。	常に、対応する方に合った言葉かけであるのか、介助の方法はどうなのかと、ケア会議などで密に情報を交換している。職員は「来年その事ができるかは分からない」ことを意識しながら、入居者を尊重した支援を心がけている。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	出来る限り利用者本人から希望を聞き、本人の意思決定によりサービスを実施している。また理解力に合わせての説明を行い支援している。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりのペースを大切に、利用者の希望に沿って好きなように過ごして頂いている。レクレーションへの参加等は無理することなく本人の希望に配慮して、柔軟な支援を行っている。		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	以前から着ていた服や、使用していた化粧品・装飾品等は自宅から持参して頂き、利用者本人の好きな身だしなみやおしゃれができるように支援している。		
42	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	現在、食事作りは集中厨房で行っているの、食事作りに参加していない。あとかたづけやテーブル拭きなどはしてもらっている。施設の畑で収穫した野菜は利用者に見せて、これが今日の食事のおかずになりますと言って	全員の表情が見え、各々のソーシャルディスタンスを保てるカウンターテーブルに座り、会話を楽しみながら、1日、15日の赤飯や、炊き込みご飯、麺類、パン食など新鮮な野菜とともに多彩なメニューを楽しんでいる。正月にはおせちを準備し、雑煮はお団子を用いるなど、安全に配慮している。食事は施設内厨房で調理されるが、肉好きの入居者が多く、メニューを見直し残食を減らしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	水分確保は個人記録にその都度、量を記録し、1400cc摂取を目安とし、利用者により調整している。食事量は利用者に合わせて加減している。特に疾患のある利用者には状態に合わせて工夫している。ティタイムは紅茶・コーヒー・日本茶・牛乳等日々アイテムを替えている		
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケアは行ってもらい、うがいもしてもらい、入れ歯をきれいに洗えるように声かけを行ったりしている。		
45	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	一人ひとりの排泄パターンの把握を行ない、排泄の失敗を少なくしている。	排泄が自立されている入居者もあるが、ほとんどは声掛けや介助など支援している。夜間もトイレ排泄を支援している方が2名おられる。家族の承諾を得て、時間やオムツ、パットの種類に配慮し、本人に合ったオムツなどを購入し、清潔保持を心がけている。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	牛乳飲んで頂いたり、刻み食にしたりなど、個々に応じた予防を行っている。便秘の兆候があるときは、訪問看護と相談し、指示を受けている。		
47	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた入浴の支援をしている	開設当初は、一人ひとりに合わせて入浴を行っていたが、現在は曜日・時間を決めて行っている。月・水・金が入浴日。7月・8月は日曜日以外毎日入浴。	週3回の入浴と週3回の足浴を組み合わせ月2回部屋履きを洗い、足趾はいつも清潔である。102歳の入居者が「入るのやめとこ」と入浴を億劫がられることがあるが「足がカサカサしませんか」と声掛けすると「そうたい。はいろかね」と入浴されている。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	昼食後のひと時などソファーで休息、昼寝などしている。居室での休息を希望すれば、居室へ誘導している。夜、就寝する時はいつも着ているパジャマに着替えて、自宅と同じようにリラックスしていただけるようにしている。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬の目的や用法、用量について理解し、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている。各利用者の薬の仕分けは訪問看護のナースが毎日行っている。		
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	歌を歌ったり。洗濯ものをたたんで頂くなど生活歴に応じた役割や気分転換を図っている。時にはおやつは、デッキで午後は紅茶気分。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51	(21)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	今年は外出支援はできていない。病院受診は職員が支援している。時には家族が来所して病院受診を行うこともある。	コロナ禍の中、気分転換にテラスで過ごす事もあり、調査日ベランダで日光浴をされてにこやかになられ職員と冗談を言い合う姿があった。庭のコスモス見学を行ったり、テラスでの先日のサンマ焼きは、炭火で焼きながら、2匹食べた方もいる。	
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	利用者本人は全員お金を所持していません。外に出かけアイスクリーム等を食べる時も職員がお金を管理している。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者本人が電話をしたいという申し出は今のところない。家族に電話して会いに来るように言っているとされた時は、すぐに連絡を取っている。		
54	(22)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	玄関には季節感のある花などを置き、居間のカウンターには季節ごとの置物を飾り、季節感を取り入れている。室温は温度計と利用者の要望で調整し、加湿空気清浄機を使って室内を居心地良く過ごせるように工夫している。室内は利用者の青春時代の歌や童謡、クラシックを流している。	中庭のコスモスが揺れ、畑の大根や柑橘の実りが季節を感じさせる。厨房をカウンターテーブルが囲み、入居者が全員座って顔が見える作りで配膳しながらリビング全体が見渡せる。ソファの配置も車椅子の通りを配慮し、リビングで入居者達が寛げるよう、空調を整備し、清掃の行き届いた共用空間となっている。食後には、ゆったりした椅子で、お喋りを楽しむ声が響いていた。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	一人掛けのいすを対面式にならべ、全員が一緒に座られる。一人でいたいときは、黄色のソファに座られている。		
56	(23)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者が以前使っていたダンスや小物・飾り物を居室に置き、少しでも居心地良く過ごせるようにしている。	居室ごとに入り口にそれぞれの長さの暖簾やカーテンがかかり、使い慣れた立派な筆筒やテーブルや椅子などが持ち込まれている。壁に誕生祝いの職員手作りの色紙が張られ、家族写真や遺影が飾られている。整理整頓の行き届いた居心地よい居室となっている。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	廊下、フロアにはものは置かず利用者が移動しやすくし、トイレは廊下に3つ、フロアに1つ配置し本人が気に入ったトイレを利用している。		